

ヤマトダマシイ

友人がハワイ島に移り住んだのを機会に、私もこの島を訪れるようになった。三度目の訪問は二〇一四年、夏。アメリカ上院議員とハワイ州知事選の、選挙活動まったただ中の時期であった。

テレビに流れる立候補者の宣伝や道路脇に立てられた選挙看板を見て、ハワイ州における立候補者には日本姓が多いことを知った。それは、移民にルーツを持つハワイの日系人が、この地に生活の根を下ろし、地位を築いてきた証であろう。日本からハワイへの「官約移民」が始まったのは、一八八五年（明治十八年）からだ。「三年間で四百円稼げる」といった謳い文句で盛大に募集され、貧しさにあえぐ約三万人（一説には七万余）の人々が、新天地を求めて出航していった。

ところが、移民先で待ち受けていたのは、サトウキビ耕地での過酷な労働と低賃金であった。奴隷のような生活に耐え

小川 はつこ

られなくなっても帰国費用はないし、そもそも三年間という契約期間内に辞めることは法的に認められていなかった。日本人達は忍耐強く働き、血と汗を金に変え、ついには自分の土地を手に入れていったのだ。

ハワイ諸島で一番大きな島であることから、ビッグ・アイランドの通称でよばれるハワイ島には、冷え固まった溶岩がむき出しの土地とドライエリアが広がっている。耕地は、比較的雨の多いヒロ方面とコハラ地区、そしてコナの高地に集まっている。それまで二回のハワイ島訪問で知ったのは、コーヒー産業をはじめ、現在に至るまでの日系人の足跡を残すものが多いことだった。

北西部のコナ地区に、およそ二十キロにわたって延びるコーヒー・ロードも、その一つである。レンタカーを走らせて

いくと、コーヒーの栽培と小売りをする農家が、延々と続く。そのほとんどが日系人であることは、道路沿いに立つ控えめな看板に記された名前から推測された。同じく名前から日系人の経営であることが分かるのは、こじんまりしたホテルや商店であった。ハワイ島の中でも、特に日系移民のかかわりの強さを感じさせる地域といえよう。

コーヒー・ロードのはずれには、日本人墓地がある。墓石から分かるのは、沖縄・熊本・広島・福島の出身が多いのと、幼い子どもや若年で亡くなった人が多いことだ。中には、崩れた溶岩を積み上げただけの墓や、明らかに素人の手で文字を刻まれた墓石もある。墓地の入り口には、「興業の碑」と刻まれた大きな記念碑があった。

今回の旅では、そのコーヒー・ロードのほぼ中央にある、キムラ・ラウハラ店をまず訪れた。もうすぐ九十歳になるというキムラおばあちゃんは、顔は全くの日本人だが、英語しか話せない。以前に墓地で見かけた記念碑は、刈り取ったサ

トウキビを運び出すための鉄道を敷いた人物を讀えたものだ、このおぼあちゃんに教えてくれた。今でこそコーヒー栽培一色のこのあたりだが、昔はサトウキビ栽培が中心だったという。高台にあり、海からの傾斜が急な土地である。人力で大量のサトウキビを運び出す作業は重労働だったろう。鉄道はそれを解決してくれたのだ。

この店は、キムラおぼあちゃんの先代が興したもので、店に置いているラウハラ商品は、コナに住む日系人の生活を助けるために売り始めたのだという。移民者としての日系人の暮らしは、非常に貧しかった。彼らは、ラウハラという植物の葉を材料に、カゴや敷物等の生活用品を手作りして使っていた。先代は、それらを商品として売れば、日系人の暮らしの援助になると考えたそうだ。

当時の暮らしをさらに尋ねようとする、彼女は「コナ・リビング・ヒストリー」へ行くことを勧めてくれた。話を聞かせてもらった礼を言い、私が店を出ようとする、

「ヤマトダマシイ」

彼女は、そう言った。店の外に半身を出していた私がふり返ると、彼女はニコニコ笑って手を振った。

彼女の口から唯一出た日本語が、「ヤマトダマシイ」であったことが、私を戸惑わせた。しかし、日本人に対する単なるあいさつ程度の言葉だろうと受け流した。例えば、日本人と見るや「バサールでゴザール」と声をかけるような。ところが、この島に住む友人に確かめてみると、「聞いたことがない」と言う。本土から移住したアメリカ人の彼女は、日本で二年程暮らしたことがあり、大和魂という言葉は知っていた。

では、おそらく日本を訪れたことが無いであろうキムラおぼあちゃんの言う「ヤマトダマシイ」とは、何を意味したのだろう。彼女が、この言葉にどんな意味を込めて言ったのか、島の過去と現在から、私なりに考えさせられることになった。

「大和魂」は、日本人にはなじみのある言葉だが、改めて意味を確認しようとする、手持ちの辞書を引いてみた。すると、次のように説明されていた。

①学問上の知識に対し、実生活上の知恵・才覚。

②日本民族固有の精神。勇猛で潔いのが特性とされる。

大和魂に、「実生活上の知恵・才覚」という意味があったことを、私は初めて知った。戦争中の超国家主義のもとでは、②の「勇猛で潔い精神」だけが強調され、お国のために勇敢に命を捧げるのが大和魂であるかのごとく、国民を鼓舞するために使われてしまったようだ。戦争時代を知らない私でも、大和魂とは国のために命を惜しまない精神のことだと思っていた。スポーツ観戦をしていると、「大和魂でがんばれ」と言う声援を耳にすることがある。これは、根性を出して果敢に攻めろといった気持ちで言うのだから、②の「勇猛」に通じる。

現在、大和魂を①の「知恵や才覚」を表す意味で用いることはないだろう。大和の国に住む日本人でさえ忘れている、あるいは全く知らない①の意味で、彼女が「ヤマトダマシイ」を表現したとは考え難い。

それでは、日本民族固有の勇猛で潔い

精神という②の意味で使ったのだろうか。生活様式も考え方も、もはや全くアメリカンな日系人である。これも簡単には結びつかなかった。

第二次世界大戦での日系人と言えば、四四二連隊と第百歩兵大隊が有名だ。日系青年達が自ら志願して米軍兵士となったこの連隊と大隊は、日系人だけで構成されている。なぜ日系人だけなのか、なぜ第百などという有り得ない番号の大隊なのか。それについては、日系人への差別と蔑視が関係したようだ。

日系人は苛酷な条件の中で懸命に働き、手に入れた安い未開墾の土地を農地に変えていった。労働力を得るために日本から家族や花嫁を呼び寄せ、コミュニティを築き上げていった。

ところがそれは、ヨーロッパにおけるユダヤ人に対する感情と似通ったものを、米国内に生み出すことになったようだ。日系人への脅威と蔑視を持つ米兵達とは、別部隊で編成されることになったわけだ。しかも、数に入っていないぞと言わんばかりの「第百」である。

ヨーロッパ戦線において命がけの救出劇をやったのけた四四二連隊は、マスコミで取りあげられることが多い。ハワイ出身の故ダニエル・イノウエ上院議員も、デイビッド・イゲ知事の祖父も、この部隊の生き残りである。日系移民を、米国人として認めさせたのは、彼らの勇猛なる精神と忠誠心であった。キムラおばあちゃんは、二世、三世が出征していく姿を、十代の娘時代に見たはずだ。

その点から推測すると、②の「勇猛で潔い」のが、ハワイ島に生きる「ヤマトダマシイ」だと考えることもできる。

では、①の「生活上の知恵・才覚」という意味では、どうだろう。ハワイの日系人達が、大和魂という言葉に知恵・才覚の意味があることは知らなかったとしても、自分たちの祖先の生き方を日系人のソウルだと感じていたら……。

キムラおばあちゃんの言う「ヤマトダマシイ」を求めて、彼女に勧められたコナ・リビング・ヒストリーを訪れることにした。

そのゲートは、コーヒー・ロードを数

キロ南下した右手にある。以前にも二度来ていたのだが、二回ともクロウズの札がかかっけていて入れなかった。今回は、キムラおばあちゃんの連絡を受けたエツコさんという四十代の女性が、待っていてくれた。

ゲートから海側へ数十メートル下ると、斜面にコーヒー園と畑地があり、それに囲まれて一軒の木造家屋が見えた。納屋にも見えるその家屋の周りには、コーヒー豆の乾燥台や小屋、トイレが建っていた。この家には、一九九六年まで内田さんという老夫婦が住んでいたそうだ。奥さんは、ピクチャーブライドで日本からやってきたという。熊本県出身の二人は、サトウキビ畑で三年働いてからアメリカ本土に渡り、そこで貯めた金を元に、この島でコーヒー栽培を始めた。

低い戸口をくぐると狭い土間があり、正面は板戸で仕切られた部屋になっている。土間は右手から左へ鉤の手に曲がって炊事場に行く。

室内を見学していくと、そこは日系移民の知恵の宝庫であった。生活に必要な物は、全て手作りである。例えば、タン

ス・柵・机といった家財道具から、なんと仏壇や神棚まである。内田さんに大工さんの経験があったわけではないのに、職人技の精巧さでできているのだから、感心を通り越して驚きであった。

敷物やカゴといった生活用品は、ラウハラを編んで作ってある。ラウハラ製のヤジロベイと人形は、子ども達の玩具だ。台所にも様々な工夫が凝らされていて、

その一つは釜を持ち上げるための、栓抜きに似た形の道具だった。家族が多いので、炊く米の量も多い。家人は皆忙しく、食事でさえ慌ただしい時間であつたらう。一本の木でできた単純な作りだが、重い釜をてこの原理で軽く持ち上げられれば大助かりだ。知恵と技の賜だろう。

仕事の道具では、コーヒーの高枝を引っぱり下げる物だとか、斜面に対応できる脚立などもあつた。左右の足の長さを変えただけの脚立だが、便利な物を創り出そうとする日本人のきまじめさと繊細さがうかがえる。

主食の米はカリフォルニア米で、薄地の布袋に入っていた。その袋も無駄にはしない。服や下着、カバンに作り直した

のだ。壁につるされていた子供用の通学カバンには、米袋に記されていた英語の文字が読み取れた。カーテンも米袋製だから、おおざっぱなパッチワークになっている。そこにも、カリフォルニア・ライスの文字が入っていた。さらに、トタンの屋根がむき出しの部屋には、暑さを和らげるために、米袋のパッチワークが天井いっぱいにつり下げられていた。

生活を向上させるための知恵と苦勞を、当時に身をおいて実感することができた。ここは、キムラ・ラウハラ店の支援で運営されていると聞いた。保存し公開するのは、記憶を風化させないためだろう。では、キムラおばあちゃんの言う「ヤマトダマシイ」とは、日系人の知恵と、苦勞を乗り越える力のことだったのか。

仏教に対する意識からも、ヤマトダマシイを探れないだろうか。数年前に観たテレビ番組がヒントになり、そう思っていた。

戦中、「ハワイの仏教徒はアメリカ人だから、米国に忠誠を尽くせ」と説いた仏教界が、戦後は閉鎖的になり、米国社会

に融合できなかった。一方、日系人の方は、ハワイの米国民として社会にとけ込もうと努力した。二つの方向性が相反した結果が、日系人の仏教離れであつた。そんな内容だったと記憶している。

仏教から離れていった日系人は、心よりどこをどこに求めているのだろうか。それが分かれば、ヤマトダマシイにつながるのではないかと、私は期待した。

コナの大佛寺を訪れると、本堂の前に「ダイフクジ100年アニバーサリー」の大きな横幕が掲げられていた。応対してくれたのは慈光さんという女性住職さんだった。

「信徒数は増えていきますよ」

彼女は、横幕に目をやりながら穏やかな表情で言った。思いがけない返事だった。

日系人にとって仏教や寺は、家族やコミュニティのつながりと、一世・二世ジェネレーションへの尊敬を深める場になっているのだと、慈光さんは言う。彼女が見つめる横幕には、「私達が今ここに

あることに、限らない感謝をします」という文字があつた。私達とは誰のことか、感謝の対象は誰なのか。様々に受け取れ

るが、慈光さんの話を聞くと、現在の日系人達から祖先への感謝とも考えられた。

仏教行事の折に家族や親戚が集まり絆を深めることで、艱難辛苦の末に日系の文化や地位を築き上げてくれた父母・祖母・曾祖父母達に感謝し、先祖への誇りを新たにしている日系人達。彼らの心のよりどころは、そこにあったのか。

そうすると、「ヤマトダマシイ」とは、日系人の心に受け継がれる感謝と誇りのことを言ったのだろうか。

町に出れば「もち」「あんぱん」「べんとう」と名のついた食品が、スープなどで日常的に売られているが、モチモチした食感のものなら「もち」であり、甘いパンの総称が「あんぱん」である。ご飯の上に大きな唐揚げを一つのつけただけの、見た目の悪い「べんとう」も、日本人の感覚とは違う。

そういえば、十二月に来た時には、鏡餅やしめ縄等の正月飾りが並んでいたが、見るからにおもちゃっぽい出来だった。それを思い出しながらスーパの商品を眺めていたら、「よっこらしよっ」と言う

声が聞こえた。最下段の陳列棚の前にしゃがんでいた人が、立ち上がる時に発した掛け声だった。日系人に違いない。英語を母語としながら、そんな場面で日本語が出てくるなんて、愉快だった。日系人は、アメリカ人である。しかし、日本人の血と文化を確かに受け継いでいるのだ、と感じた出来事だった。

食以外の文化では、ボンダンスが印象的だった。島内各地の本願寺名を染め抜いた法被姿が、炭坑節などの懐かしい曲に合わせて、櫓の周りをまわっていた。歌い手の言葉はあやしげな日本語で、意味も分からず歌っているようだった。替わってやりたいような、もどかしい思いで聞いていた。

しかし、福島太鼓の演技は見事だった。最近の日本で見受けられがちな、本来の文化を見失った祭りとは違い、伝統を感じさせる力強さで響いてきた。苦しさを耐え抜いてきた一世・二世は、コミュニティで支え合ってボンダンスを楽しんだことだろう。その純粋で必死な思いが、長きは百数十年を経てまなお、故郷の文化として受け継がれているのだ。

私が日本から来たことを知ると、踊りの輪に入れとしきりに声をかけてくれた。会場に飾られた提灯と太鼓は、福島県から贈られたものだそうだ。東日本大震災後には、福島出身の祖先を持つ日系人達が、義援金を送ったという。

日本を離れて何十年を経た人も、自らは日本を知らない人も、過去から現在に綿々と流れる日系人の魂を受け継ぎ、受け渡そうとしているのだ。自らを米国人だと断言しながら、自分たちのルーツを、誇りあるものとして失わずにいるのだろう。

ハワイ島の「ヤマトダマシイ」とは、何だろう。

国のために戦ったという点では、四四二部隊の二世達がいる。しかし動機は、日系人への偏見を打ち砕くためであった。お国のためではなく、自分たち日系社会の名誉のためだったのだ。勇敢に命を捧げたとは言え、それが「大和魂」に通じるだろうか。通じるのなら、敵国だった日本人の私に向かつて、「ヤマトダマシイ」と言うだろうか。

日系人として生きてきたのは、戦争の

時代だけではない。彼らのヤマトダマシイを、単純に「勇猛で潔く命を捧げる精神」であるとは考えたくない。しかし、明確に知恵や才覚のことだと断言もできない。迷いをのこしたまま、私は帰国便に乗った。

飛行機は離陸直後に機体を傾け、窓からハワイ島の溶岩と海を見せてくれた。光る青と水色の海が、細長く続く白い波を作り、黒い溶岩の岸に打ちつけている。美しいが、厳しい島だ。日系人が生きてきた島だ。

ふと、思いついた。この島の過去と現在、ここに生きた人々の苦勞と成果、それら全てを含んで考えてみたらどうだろう。そこから生まれ育つたものが、ハワイのヤマトダマシイではないだろうか。アメリカ人である彼らの中に大和魂があるとすれば、それは、一世・二世から受け継いだアイデンティティであるとか考えられない。私は、辞書に説明されていた「大和魂」に、こだわりすぎていたようだ。

十日間の滞在で、自分は何が分かったのだろうか、思い返してみた。コナ・リ

ビング・ヒストリーとボンダンスが教えてくれたのは、移民から始まった日系人の歴史が、困難に耐え、コミュニティで支え合い、生活を向上させてきたという誇らしい歴史だということだった。大福寺とボンダンスで知ったのは、ハワイ島の日系人達が、逆境の時代も前を向いて生き抜いた一世・二世を尊敬し、感謝していることだった。そして、途切れることなくその流れを受け継いでいこうとしていた。

知恵と連帯で苦難を乗り越えてきた、日系の精神：そうだ！彼らが誇るヤマトダマシイとは、そこにあつたのだ。やつと、私なりの結論が見えた。

窓の外に目をやると、平らな海とその上に広がる薄い雲だけになっていた。「ハワイ島のヤマトダマシイとは、忍耐力と知恵と連帯、それら全てを含んだ豊かな精神のことである」キムラおばあちゃん、どうですか？

政府の無責任な推奨と誘い文句で始まったのが、ハワイの移民である。個のためにあるべきはずの国が、移民先での困

難に手をさしのべることは殆どなかった。移民とは棄民ではなかったのか、と思えてくる。

だが、移民達の精神は崇高で逞しかった。彼らは、貧しさも苦しみも乗り越え、家族とコミュニティの生活を向上させた。そして、その精神を「ヤマトダマシイ」として、今なお受け継いでいこうとしているのだ。

蛇足になるが、日本の今はどうだろう。いつかまた、お国のための個人になつてしまわないようにと願わずにいられない。知恵と才覚という大和魂を、今こそ持たねばならない時ではないだろうか。キムラおばあちゃんの「ヤマトダマシイ」は、現代の日本に住む私にそんなことも考えさせる言葉になった。